私の騎士（かれ）は女の子！？

猿道　忠之進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の騎士（かれ）は女の子！？

【Ｎコード】
Ｎ８５７３Ｚ

【作者名】
猿道　忠之進

【あらすじ】
戦乱の大陸ハームレイ、その中で最も大きく安定しているのが、騎士の国ベルムンティア王国である。
そのベルムンティア王国の近衛騎士、エスティオ・アストールは若手ナンバーワンと呼ばれる実力者だ。
そんな彼が元宮廷魔術師で、指名手配犯の黒魔術師ゴルバルナを追い詰めるのだが……。あと一歩のところで逆に返り討ちにあう。
意識の途切れた彼が目を覚ますと、彼は絶世の美少女になっていた。
彼女（かれ）の体を取り戻す旅が今、始まろうとしていた。

コメディ女体化ファンタジーです。読んでいただけると、とても光栄です。評価や批評を頂けると、なおのこと光栄です。

プロローグ（前書き）

序盤はタグにある男の子、オネショタ要素は一切ありません。

プロローグ

町に一歩出れば、路地には露店が並んで、活気があふれている。

商店の前で値段交渉をする主婦や、その周囲を駆け回る子ども、老若男女すべてがここの客層である。そんな人ごみの中を、一際体格の大きな青年が歩いていた。

背丈は人より頭が一つ分抜きん出て、体格は一言で表せば筋肉質だ。均整のとれた体つきから、その青年が何かしら武道をしているのはすぐわかる。

その彼の顔はとても不機嫌そうなものだった。

「何が、褒美の休暇だ。ただの厄介払いじゃねえか」

などと毒づく青年は、プラチナブロンドの短髪の頭をかきながら毒づいていた。

「アストール。気分転換は必要だよ。最近は休暇もろくになかったし、いいんじゃないの？」

そう言って彼の横を歩く女性が、話しかけていた。別段女性として背が低いわけでもないが、その青年、エスティオ・アストールの横に並ぶとまるで大人と子どものように見える。

「気分転換か……。こんなにスッキリしないのに、気分転換も何もあるかよ」

アストールはそう言うと、王城で起きた事件の事を思い出していた。

「ああ！　ちきしょう！　思い出しただけで、ゴルバの野郎を逃がしたのが腹が立ってくるぜ！」

アストールはそう言うと、むっとした顔で叫んでいた。
だからと言って、彼を見る人はいないに等しい。叫び声も周囲の活気の中に、飲み込まれていた。

「仕方なかろう。アストールよ。奴は宮廷魔術師でありながら、黒魔術にまで手を出していた。そして、何より、奴はこの国で一番の魔術師だ。あんな悪魔どもを召喚されては、我々とてどうしようもない」

そう言ってアストールを諭すのは、ジュナル・レストニアという魔術師である。彼の従者であり、教育係も務めている。
３３歳と歳の割には落ち着き払っていて、どことなく爺くさいおやじである。

「ジュナルの言うとおり。王城が損壊するくらいに暴れられたら、どうしようもないって」

「メアリー。あいつは今でも黒魔術の生贄を探してるんだぞ？　しかも、生きた人間をだ！　そんな奴を放って、こうやって遊んでられるかよ」

そう言って先ほどの女性、ことメアリーに対して言う。だが、彼女の答えは至って冷静なものだった。

「見つけようにも、見つけられない。ましてや、相手は鼻のいい犬と一緒。こっちが近づけば、臭いに気付いて逃げちゃうよ？　だったら、尻尾だすの待つのが、狩りのセオリーでしょ？」

メアリーはそう言って如何にも、元猟師らしいことを言う。

「だがよぉ。ん？」

反論しようとしたアストールは、そこで言葉を止めていた。

何かを見つけ、目を細めて一点を見つめる。

すぐに異変に気付いた二人は、アストールの顔を見ながら問いかける。

「どうしたエスティオよ？」

「いや、さっきゴルバを見たような気がして、あの外套を被った野郎」

そう言ってアストールは、人ごみの中を指さしていた。その先には確かに外套を頭からかぶった怪しい人物が、歩いている。

「まさか。こんな近くにいるわけないじゃん」

メアリーはそう言うなり、アストールの背中に抱きつくように飛び乗っていた。目を細めて彼の言う外套男を見ると、男は一瞬だけちらりと顔をこちらに向ける。

そこで二人は言葉を合わせていた。

「本当にゴルバルナだ」

「ジュナル！　すぐに駐屯騎士隊を呼んで来い！　メアリー！　お前は早馬に乗って王城に知らせるんだ！」

アストールの的確な指示に、二人は顔を合わせていた。

「何やってる！？　奴が逃げるぞ！」

「だが、エスティオよ。一人で行っては危険すぎるのではないか？」

ジュナルの問いに、彼は不敵な笑みを浮かべて答えていた。

「借りはきっちり返す。俺はあいつを追う！」

そういうなり、彼は腰に下げていた剣をぽんぽんと叩いていた。

「やはり、一人で行くのはよさぬか。ここはやはり三人で行った方が」

「近衛騎士のご主人様からの命令だぞ？」

そう言われると、さすがのジュナルも引き下がるしかない。

因縁のある相手ゆえに、アストールが一人で行きたがるのはよくわかる。だが、相手は元宮廷魔術師であり、現在は大魔術師と言っても過言ではない相手だ。

一人で行くには危険が過ぎる。

「な～に、心配すんな。無理はするが、無茶はしない」

アストールのその言葉に、二人は不安を隠せなかった。だが、呼び止めるよりも先に、彼は走り出していた。

大きな背中を見送った二人は、主人の身を按じながら言われたことを実行するのだった。

◆

「この野郎！　待ちやがれ！　腐れど変態魔術師がああ！」

アストールが駆けているのは、町からほどなくしてある森の中だ。

外套男は彼を見るなり、即座に逃げだしていた。それがアストールの足を、余計に速めていた。

けして若くはないゴルバルナが、１８の体躯のいい青年に追いつかれるのは時間の問題だった。暫くして、外套の男、ゴルバルナは走るのをやめて、彼の方へと向き直る。

「く、この筋肉馬鹿のオーガめ！」

ハアハアと息を切らせた初老のゴルバルナは、アストールを前に毒づく。

「へへ！　体力だけは自信があるんでね！　さあ、変態爺！　覚悟しやがれ」

アストールは鼻をすすると、腰の帯剣を抜いて構える。

例え相手が丸腰であっても、容赦をしない覚悟の表れとも取れる。

「く、こんな男に、私の夢が、計画が邪魔されるとは！」

ゴルバルナはそう言うと、殺気を込めてアストールを睨み付ける。そして、腰から杖を取り出して構えていた。

「観念しろ！　どうせすぐに騎士隊が来る。てめえは終わりだ」

「それはどうかのお？　さあ、行くぞ。炎の聖霊よ。我が言葉にしたが」

詠唱を始めたゴルバルナに、アストールは一気に間合いを詰めていく。

ゆうに大きな家一つ分くらいの距離を、あっという間に詰めていた。

「な、なんと！？」

詠唱が終わるよりも先に、アストールの鋭い太刀筋がゴルバルナを襲う。

ゴルバルナはとっさに杖を横に構えて、彼の太刀筋を防ごうとした。だが……。

剣が杖を真っ二つに斬り、ゴルバルナはおじけずいてその場に尻もちをつく。

「へ、魔術師ってのは、杖がねえと何も出来ねえ人間なんだろ？」

杖を折られたゴルバルナは、不敵に笑みを浮かべるアストールを見上げ、悔しそうに睨み付けていた。

「貴様、それを知っていて、わざとあの距離を」

「ああ。あえて、てめえの杖を切らせてもらったんだ。さあ、次はてめえの番だ」

アストールはそう言うと、剣の切っ先をゴルバの首に突きつける。

形勢は完全にアストールのものとなり、ゴルバは一瞬で表情を変えていた。

「ひいい。ま、待ってくれ。助けてくれ」

おびえた表情を見せて、右手をアストールに向けるゴルバルナ。それを見て、アストールは表情をゆがませる。

「ああん？　てめえはそうやって助けを求める人を、黒魔術の実験で殺していったんだろうが？　助けてやるぎりなんてな、ねえんだよ！」

アストールはそう言うと、剣をゴルバルナの喉元に突き立てようとする。その時だった。

突然アストールの胸の前で爆発が起こり、焼けつくような炎が彼を襲っていた。

爆風で吹き飛ばされたアストールは、剣を抜いた位置まで吹き飛ばされる。

「ぐああ！」

地面に叩き付けられたアストールは、薄目を開けてゴルバルナを見る。ゴルバルナは右手をそのままにして、立ち上がり愉悦に浸った笑みを浮かべていた。

「どうじゃ？　儂の一世一代の大演技は？　見事じゃったろう？」

ゴルバルナは煙の上がる右腕を上げたまま、ゆっくりと歩み寄る。アストールが持っていた帯剣はどこかに吹き飛び、魔法をもろに受けた彼は胸を押さえて動けないでいた。

「な、なぜ。杖は破壊したはずだ……」

その言葉を聞いた瞬間に、ゴルバルナはどっと笑いだしていた。

「ははは。忘れたか、儂は黒魔術師よ。禁断魔法でこのくらいのことなど、容易いことよ！」

一気に形成の逆転した立場に、ゴルバルナはどっと笑いだす。

「ああ、愉快愉快。儂の計画を邪魔し、頓挫させてくれた貴様には最高のプレゼントじゃ」

魔法をもろに食らったアストールは意識を失いかけ、朦朧とする意識の中呟いていた。

「ああ、ちきしょう。最後に最高の女が抱きたかったぜ……」

そういうなり、彼の意識はぷっつりと途切れていた。

本当ならば、ここで彼の命などなくなっていたに等しい。だが、ゴルバルナは右手を下げ、気を失っている彼の前まで歩み寄る。

「ふむ。ただ、殺すだけではつまらんな。どうせなら、もっと精神的に苦痛を与えてやってもいいだろう。わしが味わった以上の苦しみを味わうがいい」

ゴルバルナはそう言うと、またしても歪にゆがんだ笑みを浮かべていた。

◆

ハームレイ大陸、かつては魔法を主流とした大帝国が栄えていた。だが、そんな帝国も皇帝の家柄の断絶によって、バラバラとなってしまう。

今やそのハームレイ大陸はいくつもの国々が乱立する戦乱の世を迎えていた。

そんな中、一際大きく安定した国がある。それがベルムンティア王国。

かの国ではかつて帝国が行っていた非人道的な魔術を禁止し、その魔術を研究する者に罰則を与えていた。

そして、その非人道的な魔術を研究する者を黒魔術師と呼んで、

蔑視することに成功する。世界においてもこの流れが確立し、早、
７００年。ベルムンティア王国は領土が最大となり、最盛期を迎え
ていた、

俺が女の子！？　1

「こっちにはいたか！？」

「いや、いない！」

耳に入ってくる男たちの声を聴き、アストールは目を覚ます。
いまだに魔法を受けた胸が痛み、体も自由に動かない。

「どうするんだ？」

「どうもこうもあるか！　あの黒魔術師を追い詰めたというのに」

男たちの会話を聞く限り、ゴルバルナはそう遠くには逃げていない。
何より、自分はなぜか助かっている。
そのことに安堵しながら、アストールは目を開けていた。

「大丈夫？」

目を開けるとそこにはメアリーがいる。心なしか彼女がいつもより大きく見える。

「気が付いたわ！」

ぼやける視界にアストールは、周囲を見回していた。
森の道を巡回する銀色の甲冑に身を包んだ騎士とその従者たち。
騎士は馬に跨って指示をだし、従者は森の中を捜索する。

メアリーの声に即座に現れたのは、ジュナルだった。彼もまた心配そうに、アストールを見ていた。

「大丈夫かね？」

ジュナルがそう他人行儀に聞いてくる。

心なしか、ジュナルも自分よりも背丈が大きく感じられた。

（これが敗北するってことか……）

アストールはそう思うと、なぜか涙が零れ落ちてくる。

あそこまで追い詰めておきながら、自分の油断でまたしてもゴルバルナを逃がしてしまった。そう思うと、情けなくて仕方がなく、また、胸の奥に詰まっていた思いが吹き上がってきたのだ。

「だ、大丈夫？」

慌てたようにメアリーがアストールの目頭からこぼれた涙をふき取る。

「何か怖いことでもあったのであろう。もしかするとゴルバに乱暴されていのかもしれん」

（そう、乱暴されていた。ん？　待て、確かに乱暴されたが、なんか言い方が違うよな）

「ジュナル！　そう言うことを本人の前で言わないの！」

メアリーがそう言うと、ジュナルは目を背けていた。

「お、おう。すまん。拙僧としたことが、気も使えずにすまぬ」

「でも、もしそうだったら、私、絶対許せない！」

メアリーが珍しく自分のために怒っていることに気付いて、アストールは妙にうれしくなる。ここはもう少し、彼女の膝の上で頭を寝かしておこう。

「にしても、あの筋肉馬鹿。どこ行ったのかしら？」

（ん？　筋肉馬鹿？）

寝つこうとしたアストールは、すぐに目を覚ます。

「全くもって。あのお調子者が。いくら、綺麗な裸の女性を助けたからとて、自分の着ていたすべての衣類までも被せることもなかろうに」

ジュナルの言葉を聞いて、アストールは完全に目を覚ましていた。

（お、おれが裸？　ん？　女性が裸？　じゃなくて、なんだ？　何を言ってるんだ？）

「でも、裸でゴルバを追い回してるとなると、ちょっと笑えるかも」

メアリーがそう言うと、ぷっと吹き出す。

「全くもってその通りだ。まあ、それだけ余裕があるとみていい。安心してあのバカを待とうではないか」

ジュナルも自然と笑みを浮かべて、森の方へと顔を向ける。
明らかに二人は勘違いしていた。なんせ、メアリーとジュナルの目の前に横たわっているのは……。

「な、何言ってるんだ？　俺はちゃんとここにいるじゃねえか？」

瞬時にしてアストールは絶句する。そして、その言葉を聞いたメアリーとジュナルが、怪訝な表情を浮かべていた。

自分の出した声は明らかに女性の声、それもかなりの美声だ。

数瞬動きを止めたアストールは、その場で立ち上がっていた。
立ち上がった瞬間に全ての服が、スルリと抜けおちる。自分の体を見た瞬間に、アストールは言葉を失っていた。アストールだけではない。

周囲の者が一斉に動きを止め、アストールを凝視する。
もちろん、ジュナルもメアリーもである。

手を見れば細く、明らかに女性の綺麗な指が並び、その手を痛む胸に持っていくと、豊満な乳房がついている。

「あ。ある」

そして、そのままぎこちない手つきで、股間まで手を回してがっくしと肩を落としていた。

「な、ない……！」

その奇行に暫し全員が動きを止めていたが、メアリーが慌てて下

に落ちていた服を拾ってアストールの体にかけていた。
「ちょ、ちょっと。み、みないの！　殿方は全員作業に戻りなさい！　さっさと戻れ！」
メアリーの怒るように言うと、全員がすぐに作業に戻っていた。
立ち上がったメアリーと一緒の視点に、アストールは再び絶句する。
「ちょ、ちょっと、これはどういうことだ！？　なんで俺は女に！？」
「なに言ってるの！？　そんなことより、アストールはどこなの？」
奇行に気分を害したらしく、メアリーの口調はきつい。
「え？　目の前にいるじゃねえか」
「はあ？　なになめたこと言ってんの？　あんたがアストールなわけないでしょ！」
混乱するアストールにメアリーが怒声を浴びせた。奇行に加えて見ず知らずの裸の女性がアストールと言い張るのだ。メアリーも気分が悪くなるのも無理はない。
「いやいや、メアリー聞いてくれ。俺はアストールだ。本当に俺なんだ」
「んなわけないでしょ！　あんたみたいな美女が、アストールなわけない！　第一にあいつは男よ！」

「落ち着いて聞いてくれ。メアリー！　何がなんだか俺にもわからないんだ。どうして自分が女になってるかなんて、俺が知りたいくらいなんだ！」

メアリーに対してアストールは至って真剣に話す。

最初は悪ふざけをしていると思ったのだが、とても彼女（アストール）が嘘を言っているとは思えなかった。

メアリーはそれに気付いて、怪訝な表情を見せながらも聞いていた。

「じゃあ、あんたがアストールだって言うなら、証拠をだしなさいよ」

そういわれて、アストールはしばし考えた後彼女に言っていた。

「エスティオ・アストール。王族付近衛騎士隊。第一軍団の軍団員。好んで使用する武器は大剣だ。レマニアル領の領主で、大抵、領内の奉公は爺さんにまかせきりだな。それによく口を酸っぱくして、将来のレマニアルの未来はどうなろうか心配だって言われてるぜ」

自信ありげにアストールは腰に手をやっていう。けして威張れるようなことでもないのだが、なぜか彼は自慢げにしていた。

どれもこれも知ろうと思えば、知れる範囲の答えである。それに対して、メアリーは訝しげに目を向けていた。

「信じられないわ。第一に男が女になれるわけないもの」

「じゃあ、あれはどうだ？　俺がゴルバの秘密研究所を王城地下室で見つけたこと」

アストールの口から出た言葉に、メアリーは押し黙る。

王城の地下にゴルバの研究所があったことは、一部の関係者以外には口外されていない。ましてや、誰かが喋っていれば、それこそ処刑に値する。

だが、それでもメアリーは納得しかねていた。

目の前にいる金髪美女が、アストールの名を語ること自体怪しい出来事だ。もしかすると、魔術にかけられたゴルバの手先ではないかという懸念さえある。

「それに男が女になれるわけない！」

「……じゃあ、どうすれば信じてくれる？」

アストールがそう言うと、メアリーは暫し考え込む。そして、時間をあけて答えていた。

「私との出会いを話して」

それを聞いたアストールは、すぐにしゃべりだす。

「日が昇りきらない朝だったか。お前が狩りをしてて、妖魔８体に襲われてる所を、俺が助けた。確かその時、お前は弓の矢が切れていて、無謀にも素手で戦かおうとしてたな」

そう言われた時、メアリーはにわかに信じがたいが、彼女がアストールであることを確信した。

なぜならば、その運命的な出会いは、誰にも口外していない。また、アストールにもこのことは言わないように口止めしていたのだ。

なおかつ、　初めて会ったのは森の中で、けして街中で見られるようなことはない。

要は二人だけしか知りえない情報である。

「う、うそよ。うそ」

メアリーは半分確信していただけに、余計に目の前の現実を否定したくなる。

「こんなこと、こんなことあり得るわけないじゃない！　絶対にあいつがほかの女に喋ったんだ！　女癖悪いしさ！」

「その言いようはヒドイな！　確かに女癖悪いのは認めるが、俺は秘密は守る男だ。お前との秘密は何一つ他の奴にしゃべってねえ！」

女性の声だが、いつも聞いている口調で言われて、余計にメアリーは胸が張り裂けそうになる。

「う、うそよ。こんな、こんなの」

完全に否定しようがない事実に、メアリーは涙を流していた。

「ちょっと、待てよ。泣きたいのは俺の方なんだぜ？　なんで、お

前が泣くんだよ！」

「だ、だって、だって」

すぐにでも抱きしめてやりたい所だが、生憎、ほぼ全裸の状態だ。幸いメアリーが差し出した服で、体は隠れているが、禁欲主義の宗教騎士隊には生足に生腕はいささか攻撃的すぎる。ジュナルも目のやり場に困っている様子で、泣き出したメアリーに声をかけることができないでいる。

「だあ。もう！　くそお！　あのゴルバめ！　とりあえずあいつのせいだ！」

そうやけくそ気味に言うアストールは、泣き出したメアリーを宥めつつジュナルに目を向ける。

「ジュナル！　すぐに俺の着替えと馬を用意してくれ」

一連のやり取りを見ていたジュナルは、彼女がアストールであることに気付いていた。

「はは。とはいえ、まさかアストール殿が女になるとは……」

そう言ってジュナルはその場を立ち去っていた。

アストールの身がようやく落ち着いたのは、その日の夜の事だった。

俺が女の子！？　2

宿の一室には灯りがともり、温かい光を放っている。だが、その火を囲む三人の表情は暗い。
丸テーブルを囲む三人は、茶色い髪の毛に白髪交じりのジュナルに、茶髪のショートヘアーのメアリー、そして、背中まで伸びた美しい金髪の“女性”アストールの三人である。
酒はなく、あるのは質素なコップに入った水だけだ。

「にわかには信じがたいが、これまでの話を聞く限り、この方がアストール殿であるのは間違いない」

ジュナルは渋い顔をして、アストールを見つめていた。
この宿に戻ってから、メアリーとジュナルは女体化したアストールを、改めて尋問していた。
事細かに最近あったことから、本人しか知りえないことを次々質問する。
当然、アストールは全て答えていた。

「……やっぱりあんたは本当にアストールなのね」

メアリーはとても残念そうにうつむく。

「ああ。そうだ」

アストールは少し服がきついのか、胸元ばかりを気にかける。

「にしても、少し胸のあたりがきついな」

その空気の読まない発言に、メアリーはぎっとりとした視線でアストールを見る。

「なによ。それは私の胸が小さいって、遠まわしに言いたいの？」

「い、いや、そうじゃなくて、純粋にきついんだってば」

そう言ってアストールは、自分のはち切れそうな服の胸元を指さしていた。

女性ものの服がなく、急遽メアリーの服の着替えをきているのだ。もちろん、アストール本人の服など、とてもではないがぶかぶかで着れたものではない。

「なによ！　やっぱり、冷やかしじゃない！」

「う、うるせえな！　俺だって望んでこんな体になったんじゃねえよ！」

「その言葉、余計に腹立つわ！」

メアリーがそう怒声を浴びせるが、ジュナルはため息をついてなにもしない。というよりは、アストールの胸元が気になっているせいか、どうにも目のやり場に困っていた。

「二人とも喧嘩はよせ。それよりもこの状況をどうカルマン殿に説明すればいいのか。それを考えようではないか」

休暇で訪れたこの町は、レマニアル領に帰郷する途中で寄った町だ。

まさかこの様な事になるなど、誰が想像していようか。

「……爺さんには本当のことを話すしかないだろう。それよりも俺が気になってるのは、騎士としての仕事の方だ」

アストールはそういうと、窮屈そうに胸の前で腕を組む。

ジュナルもメアリーも名案が思い浮かばないのか。全く言葉がでてこない。

「この状況だもの。急にいろいろ考えろっていわれても無茶よ」

メアリーはそう言うと大きく溜息を吐いていた。

「ふむ。まあ、そうであろうが、一応の指針はあったほうがよかろう」

ジュナルはそういうと腕を組んで考え込む。

「とりあえず、王族付近衛騎士団の騎士に女は禁制。というか、騎士そのものが女性は禁制だったわよねー」

メアリーはそういうと、アストールを見つめた。

騎士団の従者くらいならば、女性がいてもおかしくはない。だが、当の騎士の身分となると、話は違ってくる。

基本的に騎士の位に付けるのは男のみであり、女性が爵位を貰うことはない。

もしも、女性であることを公表して、形式的に騎士として居続けたとしても、いずれは爵位剥奪と言う危険さえある。

「何かいい方法はないかな……」

メアリーはそう言うと、考え込んでいた。

「いっそのこと、自分を偽ってみてはどうか？」

ジュナルがそう提言すると、アストールは苦い顔をする。どうせろくでもない提案であることに違いない事を確信しつつ、アストールは聞いていた。

「どういうことだ？」

「そうだな……。お前は実は生き別れた実の妹であり、自分の体を取り戻すまでは、兄、すなわちお前自身の騎士代行を務めるということにしておけばいいのではないか」

ジュナルの提案はある程度、説得力のあるものだった。

彼ら騎士の世界において、主人が行方不明になったり、長期で国外に出張した際は、誰かしら従者が騎士代行を務めて業務を行うことがある。

その任命権はもちろん、その主人たる騎士にある。

これは別段珍しいことではなく、従者に女性がいれば、代行を女性に頼むことさえあった。とはいえ、それでも女性の騎士代行は、異例には違いなかった。

「かなり目立つんじゃない？　それ」

メアリーはそう言ってジュナルに疑問を問いかける。

「確かに目立つであろうな。しかし、拙僧やそなたが騎士代行になって、アストール殿に指図することなど、できようかな？」

ジュナルは腕を組んで細目で、メアリーを見ていた。
「うぅ。確かにちょっと抵抗がある」
「ちょっとってなんだよ。主人だぞ？」
「なによ。別に全く忠誠心がないわけじゃないもん！」
メアリーが子どもっぽく言い返すと、ジュナルは苦笑していた、
「二人とも落ちつきなさい。エスティオよ。今日から女を演じるのも、悪くない提案であると思うが、どうであろうか？」
ジュナルが微笑を浮かべて、アストールを見つめる。
アストールは頬をピクつかせ引きつった笑みで、ジュナルと目を合わせていた。
「じょ、冗談じゃねえええ！　俺は男だぞ！？　急に女になれなんて、無茶があるだろうが！」
そう言ってアストールは椅子から立ち上がり、自分の胸を押さえていた。
彼の手に伝わる柔らかな乳房の感触、それが自分が女であるという現実を突きつける。
アストールは勢いよく叫んだことを後悔していた。
表情は暗いものとなり、ゆっくりと椅子に座る。
「す、すまねえ。確かに今は女だ……」

アストールは心底落ち込み、ため息をついていた。

「わかればよい。とはいえ、いきなり女を演じよと言っても無理であろう」

ジュナルは自分で提案したことを、いきなり否定しだした。

「というわけで、一か月ほど修道会に行ってきてはどうか？」

アストールは再び顔色を変えて、ジュナルに叫んでいた。

「ば、馬鹿言え！　なんでそんなとこに行かなくちゃなんねえんだ！　女しかいない上に陰湿だし、飯はまずいし、生活は真面目くさって規制されまくってるような場所、絶対に行かねえぞ！」

貴族の女性はある一定の年齢になると、貴族専用の修道会に入れられて、改めて貴族の嗜みというのを再教育される。

一夜を共にした女性から話を聞いていたアストールは、その厳しさと女の世界の怖さというのをある程度は知っていた。

「なんで、あんたがそんなこと知ってるの？」

メアリーが鋭い突っ込みを入れて、アストールは言葉を詰まらせる。

「あ、そ、それはだな。えーとだな。まあ、みんな知ってることじゃないか？」

「そうかな？　普通の殿方は修道会ってきいても、そこまで知らないんじゃない？」

「……ど、どうだっていいだろうが！　そんなことより、俺は絶対に行かないからな！」

焦って話をはぐらかすアストールは、ジュナルを睨み付けていた。このような提案をされるとは、思っても見なかったのだ。

「では、どうするか？　エスティオ。お前はいきなり女を演じることができるのか？」

アストールはそう言われて、言葉を詰まらせていた。だが、すぐに言い返していた。

「お、女とたくさん寝てきたし、他の騎士と違って、普段から女と付き合いがあるんだ！　そのくらい楽勝に決まってんだろ！」

彼の発言を聞いたジュナルは苦笑して、彼に言っていた。

「では、まずその喋り方から変えねばなるまい」

「うぅ。こ、これはどうにもなんねえよ」

「それに歩き方だ。傍から見ても男と分かってしまうような歩き方」

そう指摘されたアストールは押し黙るしかなかった。

いきなり女性を演じろと言われても、そうそうできるものではない。それは彼自身がよくわかっていた。

「……。だからって、そんなとこに俺を入れて、しかも、女そのものになれってのは、酷すぎるぜ」

今にも泣きだしそうな顔で、アストールはうつむいていた。

「じゃあ、女になりきれるっていうの？」

メアリーの言葉に対して、アストールは暫し黙っていた。だが、すぐに顔を上げて、答えていた。

「やるしか、ねえだろ。一か月も修道会で遊んでたんじゃ、ゴルバルナの野郎に逃げられちまう。それにあいつにこんな体にされたんだ！　戻るためにも早急に奴を見つける方が先だ！」

最もらしいこと、否、最もな意見を盾に、アストールは修道会入りを拒否する。

ジュナルもそれには納得したらしく、大きく頷いて見せていた。

「そうであったな。確かに優先すべき事を間違っておった」

「そうよね。こんな女のアストールなんて、何か馴染めないしね」

「だったら、決まりだろ！　俺も努力して極力女を演じる。だから、協力してくれ！」

アストールの真剣な表情に、メアリーは優しい笑みを浮かべる。

「当たり前でしょ！　あんたにはさっさと男に戻って、じゃんじゃん騎士として仕事してもらわないといけないし！」

ジュナルは腕を組んだまま、アストールを見つめていう。

「レマニアル領をいずれは治める身、それが女性であっては他の諸侯にも示しがつきませぬからな」

そう言われてアストールは苦笑していた。いずれは自分も祖父、父と代々アストール家で守っていた領地を引き継ぐのだ。

そうなれば、今の体のままではどうすることもできない。

結婚して養子婿をとるという選択肢もあるが、生憎、アストールは女として生きていくつもりはない。

「よし、じゃあ、さっさと爺さんに話を付けに行こう！」

「そうであるな。さて、その前にエスティオ。そなたの名前も女として改名しておかなければなるまい」

ジュナルはそう言って腕を組んだまま、アストールを見つめる。どうしても自分を女に仕立て上げたいらしく、アストールは心底機嫌を損ねていた。

「おいおい。勘弁してくれ」

「仕方あるまい。まあ、容姿からして17くらいで通じる。一つ下の妹ということで、そうであるな……。エスティオ、エスティオ……。ああ。エスティナはどうか？」

一人で勝手に話を進めていくジュナルに、アストールは諦めていた。

この後、ジュナルとメアリーによって、アストールの妹設定は次々と決められていくのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8573z/

私の騎士（かれ）は女の子！？

2011年12月27日23時52分発行